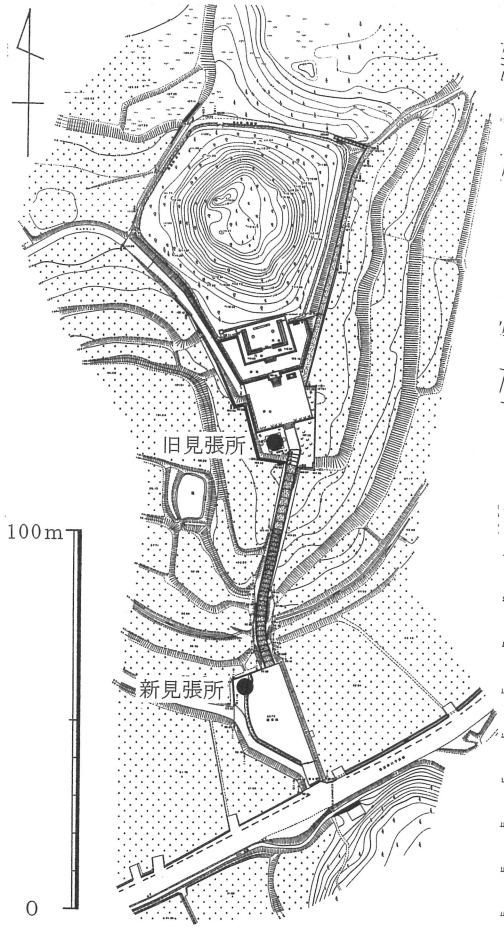
「アケビ」が候補にあげられる。

以上報告した遺物以外に施工期間中採集された遺物はなく、墳丘裾護岸工事についても予定通り施工した。（徳田誠志）

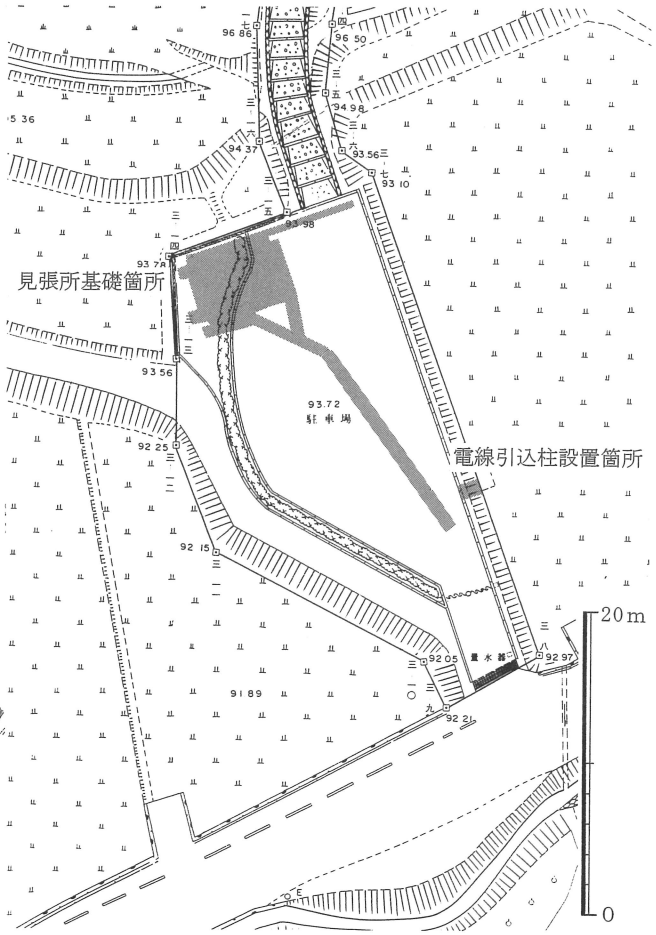
天武持統天皇　檜隈大内陵見張所改築工事箇所の立会調査

天武天皇と持統天皇の合葬陵である檜隈大内陵は奈良県高市郡明日香村大字野口に所在する。東から西へと延びる丘陵から南東方向へ突き出した支丘の頂部に立地しており(1)、墳塋は八角形とされる(2)。西方へ続く主丘の南斜面には、奇妙な石造物として名高い「鬼の俎」や「鬼の雪隠」、欽明天皇檜隈坂合陵、猿石で知られる吉備姫王檜隈墓などが所在し、本陵を含め明日香村散策のメインルートとなっている。

今回の調査は、一般拝所前に所在した見張所が経年のため老朽化し、改築されることになったため行ったものである。見張所の位置は今回の改築を機に丘陵下にある駐車場敷地の一角に変更された（第27・28図）。この駐車場敷地は、本陵が所在する北側の丘陵裾から県道の走る南側丘陵裾を結んで谷底を横断しており、東側ではおよそ１m、西南側ではおよそ２m、周囲の水田面より高い。これは、この敷地が昭和11年から12年にかけて全国の陵墓で展開された「紀元2600年

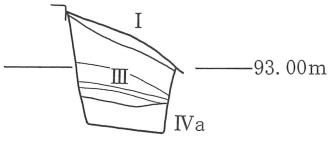


第27図　檜隈大内陵　地形図（1/2000）

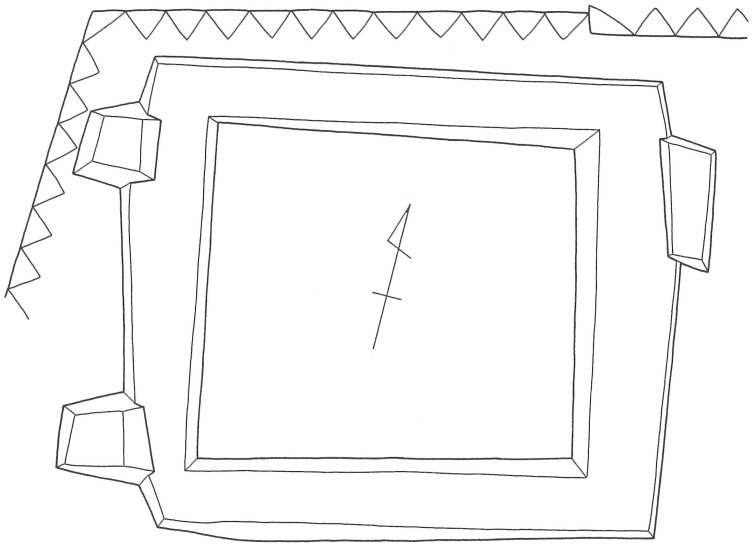


第28図　檜隈大内陵　調査箇所位置図（1/500）

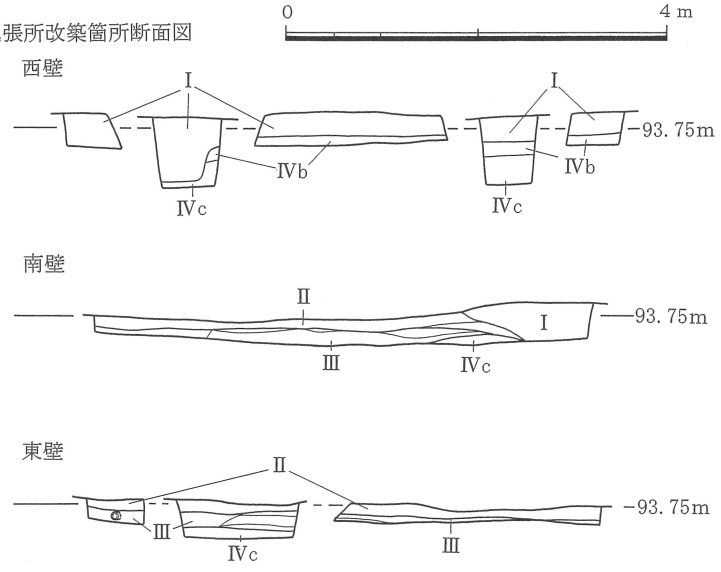
1　電線引込柱設置箇所断面図



2　見張所改築箇所平面図



3　見張所改築箇所断面図



第29図　檜隈大内陵　調査箇所平面図および断面図（1/80）

奉祝記念事業」によって造成されたためである。1999年に奈良県立橿原考古学研究所が隣接地で行った調査結果もそれを裏付けるものといえよう(3)。

調査は、平成14年9月30日～10月4日、および11月26・27日に行った。見張所基礎箇所（長さ5.4m×幅5.0m×深さ0.4～0.6m）以外にも、給水管埋設箇所（長さ6.5m×幅0.5m×深さ0.3m）や排水管・電気管埋設箇所（長さ30.0m×幅1.0m×深さ0.6～0.8m）、電線引込柱設置箇所（長さ0.7m×幅0.6m×深さ0.7～1.1m）などの付帯施設設置に伴う掘削があり、その全てに立ち会った（第29図）。

掘削箇所での土層は、表土層および表土層から掘り込まれた撹乱土層（Ⅰ層）、駐車場舗装のアスファルトおよびその下地である砂利層（II層）、駐車場敷地の造成土（III層）、駐車場敷地造成以前の土層（IV層）に大別することができる。谷状地形の中央付近にあたる電線引込柱設置箇所では、現駐車場舗装面の約1m下（L＝92.6m付近）、東隣の水田とほぼ同じレベルより青灰色粘土層（IVa層）が現れ、駐車場敷地が旧水田面上への大規模な盛土で造成されていることが確認された（第29図1）。駐車場敷地北西隅にあたる見張所基礎箇所では、東壁・南壁においてII・III層が見られ、西壁においては、Ⅰ層、旧耕作土層と思われる淡茶褐色土層（IVb層）、遺構面になり得ると思われる淡黄灰色粘質土層（IVc層）の各層を確認した（第29図2・3）。今回の掘削範囲において遺構・遺物を確認することはできなかった。

以上の結果を踏まえ工事は予定通りに施工された。　（有馬　伸）

註

（1）　この支丘全体を本陵の「基壇」とする指摘がある。
藤井利章「飛鳥谷古墳集団の復原とその歴史的意義」『末永先生米壽記念獻呈論文集』乾、末永先生米寿記念会、1985年。

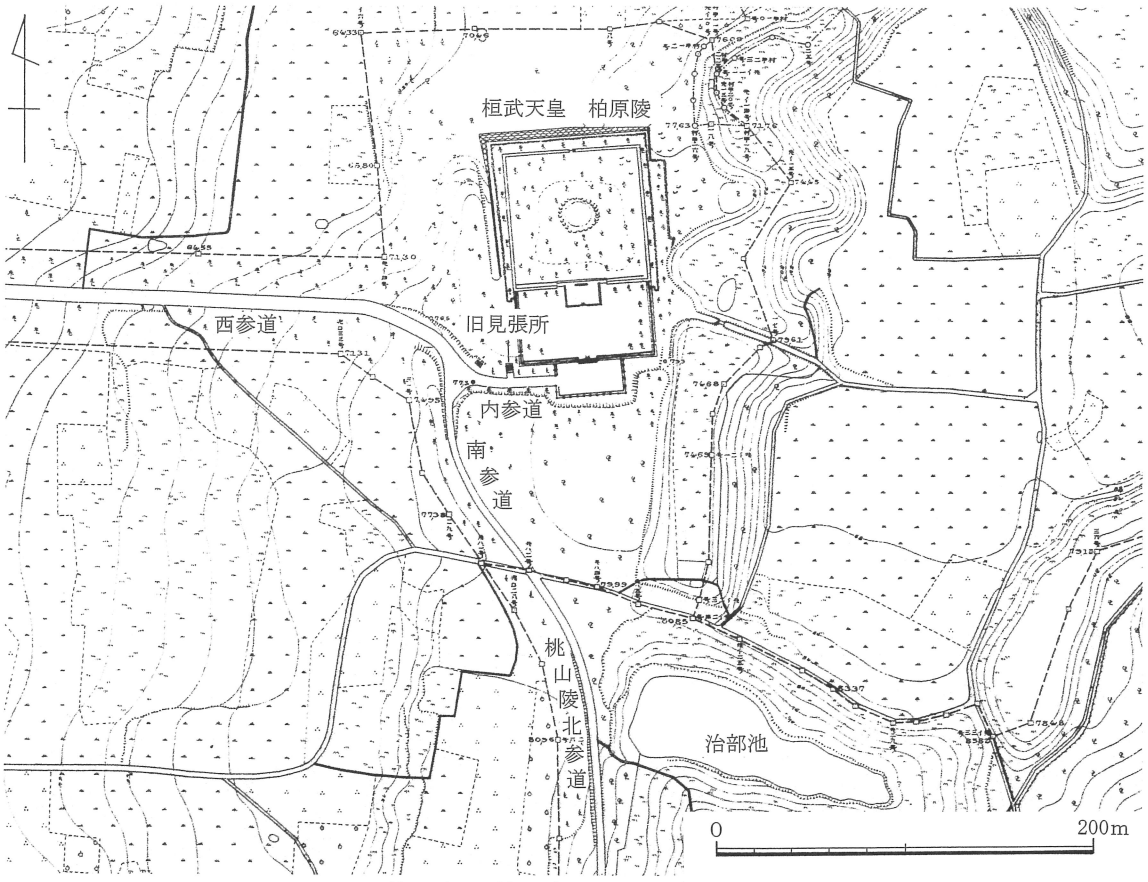
（2）　墳形およびその構造については下記論文で触れられている。
笠野　毅「舒明天皇押坂内陵の墳丘遺構」『書陵部紀要』第46号、宮内庁書陵部、1995年。

（3）　平松良雄「県道野口平田線」『奈良県遺跡調査概報』1999年度　第二分冊、奈良県立橿原考古学研究所、2000年。

桓武天皇　柏原陵見張所改築工事箇所の調査

桓武天皇の柏原陵は、京都市伏見区の桃山陵墓地の西北に位置する。周囲を方形に区画し、中央に径約15mの扁平な円丘が営まれている。『伏見城古図』などによれば、この付近は武家屋敷があったところである。谷森善臣が堀久太郎、永井右近の屋敷地に陵地を考証したことにより、明治13年（1880）、当地に治定されたものである。

この度、当陵の見張所を改築することになり、平成14年11月16日～20日に、見張所改築箇所（約20㎡、深さ0.35m）、および付随する浄化槽設置場所（長さ2.0m×幅2.0m×深さ2.2m）、さらにはハンドホール設置箇所（長さ1.4m×幅1.0m×深さ0.5m）の掘削に立ち会った（第30図）。ま



第30図　柏原陵　地形図（1/4000）